昭和51年11月28日

第76回 史跡めぐり

コース 午前九時十分 南越谷駅集合

南越谷～北朝霞下車～東円寺の不動の滝

～東円寺～本仙寺～越谷

会費 五百円（交通費他）

越谷郷土研究会

朝霞の史跡と太田道灌

同不動尊東円寺

新義真言宗。松光山薬王院と号す。石神井三宝寺末。寺伝によれば当寺は古跡なれど、開基の事は伝わらず、昔は今の地より東の方、不動坂の西に当り十二間四面の薬師堂あり故、ありて中絶す。寛弘年中に至り、永慶といふ僧、永く廃亡せし事を悲しみ力を尽して復旧に勤め、先づ一宇の精舎を造立せり。薬師堂はまだ造立に及ばずして寛文三年三月十二日示寂す。これより永慶を中

（一〇〇六）

興高祖とす。その後我国の間は住僧も或は絶き或は絶え長禄文明の頃は太田道灌この地を領し当寺の傍に城を築く、この城の事他の書に所見なし。文永の板碑外数片あり。不動の滝壺は三間四方の池を穿ち今も水を湛え二水より流れ出るもの山堂の耕地へ引いて用水を助く。

（関の城址（埼玉県選定重要遺跡）

城跡は黒目川の形成した幅広い開析谷に面した武蔵野台地占地上で南側は谷頭侵食による小支谷が入り小古墳台地を形成し占地している

る。城の形態は台地の形態に規制されて不規則で
あるが、土塁空堀がよく残り、この土塁空堀により
台地を三つの部分に区画している。本丸にあ
たる部分は現在三條と呼ばれている。なお大手
の前にある本仏寺には鎌倉末期の板碑がある
が築造年代は戦国時代と思はれるも城主や居
住者不明とある。　城山群に位し関の城山の南
麓と自力で城山を守り保護を進めている大里
治之進氏はこの城の厂史について。長禄元年頃
に太田道灌が築城して永禄年中太田新六郎康

資が居城したと関の城山史考を発表せられて
いる。そのあらましを記すると。関城は山の手台
地に続く八間台地朝霞支台の突端に位置し北
部の岬状台地に本城を南の台の端に支城を配
置している。支城の方は見張台五丈とした岩で
あると考える。本城は東西約二五〇米南北約一
七〇米。三方を堀及び沼として城の入口の岬状
の最もせまい所を堀切として独立した島状を
呈している。城地は本丸二の丸三の丸と大きく
三つの部に分かれそれぞれを又二つに分ける

事が出来る。各郭の間は空堀で切られて居り又腰曲輪とも二つの郭続きの下曲輪とも見られる郭が本丸横までめぐっている。本丸一番奥の郭で東西約六〇米、南北約四〇米周囲に土塁をめぐらし一段高いやぐら台に続いている。このやぐら台は城地で一番高い所にあり（標高二十二米）南側の堀との差は約十七米である。このやぐらの根元の埋設部分は多分現存していると思はれるが、ズッと遡れると滅失する恐れが有る。二の丸、三の郭は東西約百米、南北約七〇米で城内で一番広

事が出来る。各郭の間は空堀で切られて、屈り又
腰曲輪とも二つの郭続きの下曲輪とも見られる
郭が本丸横までめぐっている本丸一番奥の郭
で東西約六〇米、南北約四〇米周囲に土塁をめ
ぐらし一段高いやぐら台に続いている。このや
ぐら台は城地で一番高い所にあり南側の堀と
（標高二十二米）
の差は約十七米である。このやぐらの根元の埋
設部分は多分現存していると思はれるが、
が遅れると滅失する恐れが有る。二の丸この郭
は東西約百米、南北約七〇米で城内で一番広い

城外との通路にしたと考える。この郭の中堀深さ二米弱の空堀様のゆるい低地が切られているのは、この郭を分けたものか或いは馬ぎとしたものか不明である。

本仏寺

一五三一

天文元年再興の日蓮宗の寺で太田資高の妻北條氏綱の娘と何か関係があった寺か。

康資は道灌の八代の孫で、この家系は明治ト爵に列せられている。俵のお根は千三百で徳川家康に仕えお勝の局となり水戸の徳川頼

房の淮母となった。彼没後鎌倉の道俗師
尼となって英勝院と名のり死後作られた小
現在の英勝寺であり現在も鎌倉たった一つの
尼寺である。

資料

埼玉県大百科事典　埼玉新聞社
埼玉の館城跡　埼玉県教育委員会
東京史学会会報
岡の城山史考　大里勝之進
鎌倉の寺　永井路子